

緑のまきば

1996 No. 28

小金井緑町教会
 小 金 井 緑 町 教 会
 小金井市緑町四一十六一三三
 電話〇四二三・八一・七九六一
 編集・牧師 山 本 圭 一

みんな一緒に生きるために

(ルカ十章二五―三七)

山 本 圭 一

教 説

忙しい生活から退き、静まって神のことばを聞くことは、心身の活力を再生させる大切な手立てです。主イエスも「群衆に別れてから祈るために山へ退かれた」(マルコ6章46口語訳)とあります。

八ヶ岳高原・泉郷の美しい自然の中へ退き、み言葉に聞き、折る機会を与えられたことは、かけがえのない経験でした。しかも幼児から成人まで「神の家族」として起居を共にし、互いに心を通わすことができました。凝縮した時の喜びを味わいました。

「共に生きる喜び」これが主題です。善いサマリヤ人のたとえの中で一つのことを取りあげてみましょう。それは強盗に襲われ半死半生の旅人を目の当たりにしながら道の向こう側を通って行った祭司やレビ人の問題です。彼らが略奪にあった無援の旅人に偶然出会っ

た時、どういう反応を示したかという点です。そのプロセスや心のゆれは、行間に隠されています。彼らは身の危険を心配したかも知れません。また旅人を介抱している間に、旅人が死んでしまえば死体に触れて汚れた者になることを恐れたのかもしれない。嗤嗟のことで心がゆれ動いたはずですが、これは私たちが隣人に接する時、例外なしに経験するところです。また身近な隣人より遠い隣人になるほど、心のゆれが小さくなっていきます。身内の危険に心が大きくゆれても、例えば沖縄で米軍基地のため過酷な圧迫にさらされている人々のことはすぐに忘れがちです。人間の経験の密度ほど正確かなものはありません。自分に固執すればするほど、他者の痛みは見えなくなっていくのですから。しかし善いサマリヤ人のたとえは、その結果が示すように、説得

的です。「あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」とイエスは律法の専門家に問い詰め「行って、あなたも同じようにしなさい」と語られます。普通のつきあいをしていては関係では、ごく当たり前のように「私は〇〇さんの友人である」「夫である」「妻です」と考えています。「・・・である」という存在が自明のものと思いついています。しかし、そこに落とし穴が潜んでいることに気付くのは容易ではありません。私たちの人間関係はもっと動的で、愛と憎しみが入り交じっています。その都度、新しい関係を選びとっていかねばなりません。そこでは、存在に満足せず、実存の重みを噛みしめ、愛に目覚めることが求められているのではないのでしょうか。「同じようにしなさい」という主イエスの言葉が届く時、それがどんなに辛い事であっても「あなたも・・・」と主の恵みが押し寄せています。福音は喜びに満ちた新しい律法として働き続けています。もし、このたとえを主イエスから切り離すならば、その内容は一片の道徳訓に過ぎなくなり、そうではなく律法の専門家に自分を中心に据えた問題の立て方を見

直させ、他者とその困窮の状態からもう一度、出直すことを求められたのです。だから主イエスの言われる愛(アガペ)は、私たちの固有の尺度を捨て去ることから始まります。それは、すべての人のために憐れみ深い神のサマリヤ人イエスによって眼を開かれ、自身に縛りつけられた状態から、心を解き放たれた人々すべての問題なのです。愛と自由の広い世界を見渡すことが大切です。

折しも泉郷の静謐な夜の闇のゆえに、星のまばたきが心に染み透るのを痛感しました。

「夜空に星を仰いだ時、人は永遠の世界に旅立つ。」

ネパールに医療伝道された岩村昇先生は、夜は星を仰ぎながら二日も三日も歩いて保健の活動をされました。ある時、一人のネパールの青年が重いリュックを背負って助けてくれました。先生がお礼を出されたところ、彼は受け取りませんでした。そして「サンガイ・ジュネ・コラギ」(みんな一緒に生きるため)と答えたと言います。豊かな自然から隔てられた文明は、今、あまりにもみじめで退廃的です。自然の生恵から受ける恩恵を改めて心に刻みまします。